

2010年7月8日

一橋大学 大学教育開発センター
2010年度第一回全学FDシンポジウム
GPA制度本格導入後の成績評価を考える

教育開発支援機構FD推進センター
センター長 川上 忠重

2010年7月7日(水)14:00~一橋大学 国立・東キャンパスにおいて「GPA制度本格導入後の成績評価を考える」2010年度第1回全学FDシンポジウムが開催された。参加の機会を得たので、内容を簡単に紹介したい。一橋大学においては、2004年度から教育専門委員会を立ち上げ、GPA制度についての検討が行われているが、2010年度の学部入学者から、GPAが卒業要件として導入された。本シンポジウムは、GPA制度の本格導入に伴い、学生の履修行動や学習状況の変化、教員が成績評価を行う際の課題、また、今後のGPA制度の運営や成績評価のあり方を参加者一同で情報を共有しながら、その方向性を議論するものである。

第一講演として、一橋大学法学研究科教授・教育担当役員補佐 青木人志氏より、一橋大学におけるGPA制度と成績評価基準の確認として、学士課程 履修ルールブック(学部生配布用)を用いた、GPA制度の目的と概要、卒業要件としてのGPA値、「履修撤回」や「上書き再履修」等の紹介の後、GPA導入までの審議経過や今後の課題について紹介があった。特に今後の課題として、成績分布・履修行動・GPA値の推移の分析、学生の修学指導・メンタルケアの充実および成績評価のあり方等の問題提起もあり、成績評価の標準化・平準化の必要性や成績評価比率のガイドライン等を考える指針となった。

第二講演として、「GPA本格導入のインパクト」—履修行動と成績分布の検討—として、大学教育研究開発センター教授・GPA実情調査・検討作業部会委員 松塚ゆかり氏による、GPA制度導入前後の成績分布や履修行動の変化、成績付与の現状等が紹介された。成績評価に作用する要因として、クラスサイズ、難易度、常勤・非常勤、必修、試験方法、他の科目属性等も要因としての強弱も含めて事例が報告された。評価方法の課題として、インプットベース：1)教材、教授法、学習法など、学習(教育)を構成するインプットを自在に投入(固定した達成目標を定めない)2)教育のプロセスをオープンエンドに進行させる3)学習プロセスを観察・評価した結果を評価およびアウトカムベース：教科、科目、専門ごとに、1)学習(教育)の目標2)目標を達成するための学習(教育)内容3)その学習(教育)にどれほどの時間を要するか、を明示し、その達成度を評価する等が挙げられ、本学での検討課題と共通する部分も多くあり、大変参考となった。

既にGPAを卒業要件として取り入れている、福島大学経済経営学類 上野山達哉氏による「GPAの卒業要件化と学生の変化」が報告された後、参加者によるディスカッションが1時間程度行われたが、非常に教育現場に近い観点からの問題提起も数多く含まれており、GPA制度の本格導入後の展開を考える良い機会となった。

本学においても2008年度からGPA制度を導入し、昨年度学部は16学部、3専門職大学院に対するGPA制度の運用に関するヒアリングも実施した。ヒアリング結果や今回の他大学の事例を含めて、「GPA制度の本格的な活用」について、各教学単位と連携しながら検討をすすめていきたい。

以上